
廻神社

おごまめこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凪神社

【著者名】

おじまめ

【あらすじ】

貴方は凪神社を知っていますか？ 凪神社 そう、そこはとても、とても素敵な所です。

第一伝・バグ・真っ赤な。

皆さん　は　廐神社　　といつ現象を知つて いますか？

貴方は知らなかつたのですね。

そうですか、いつか出会えるといいですね。

私はもう二度と会いたくないです。

私は、ある日買い物に出掛けたんです。

いつもの商店街をゆっくりと歩き、目的のデパートへ向いました。

この道はいつも人通りが比較的多く、車の行き来も激しいので私は嫌いなのですが、そんな理由でデパートの大安売りを見す見す逃す手はありません。

とにかく前方から来る人に気を付けなければ。ぶつかつたら大変だもの。

そう考へてみると、自転車が突然走つてきて、私の横を通りました。そして私が持つていた大事な通帳や印鑑・財布が入つたカバンを物凄い力で奪い取ると、猛スピードで逃げていきました。

元々気の弱い性格です。それに、こんなに人が居るのに…

何が起こつたかすぐには理解できず、ただ呆然と疾走する自転車を眺めていました。

そしてふと我に返り、すぐに叫びました。

「え、どうぞー。」

しかし、もう自転車は随分遠く。

私はもう取り返すこと、取られたことを家族になんて言おつかと考えていました。

今月分の生活費、マイホーム建築の為にコシコシ溜めたお金、全部持つていかれてしました。

そう考えると今にも倒れそうでした。

すると突然、辺りがぐるぐると回り始めました。

貧血でも起こったかな。

とりあえずしゃがんだ所、地面は回っていない」とお気付きました。

景色、そう景色だけがだんだんと姿を変えていきます。

気付けばそこは、深い緑に囲まれ温かい木漏れ日が差し込む田舎の神社でした。

不思議と私は、そこに居ることに何の疑問も抱きませんでした。

気分は至極穏やかで、先程の事なども忘れていました。

しばらく、緩やかな風に身を任せていると神社の中から一人の少女が出てきました。

巫女さんでしょうか。

体、顔は中学生か高校生ぐらいの可愛らしい女の子でしたが、その体からは想像できないような威厳がかもし出されていました。

少女はゆっくりと神社の階段を降り、私の前にきました。そして、しばらく私の眼を見つめた後こう咳きました。

「ここは凧神社。貴方を助ける為に存在し、貴方を陥れる為に存在する。問おう。貴方は何を今願う？」

少女は表情一つ変えず、ずっと私を睨み続けます。私は、言葉の意味を考えました。考えましたが、何故か冷静で居られません。

恐怖と欲望が同時にやつてくるのです。

先程までの落ち着きはなくなり、緩やかな風が冷たい風に感じ、木漏れ日が身を焼く様に私を照らし、木々は私を飲み込まんばかりにザワツザワツと揺れます。

そうだ、望み・・・わしきの引つたぐり・・・返してもらおうー。

私は頭から出でぐる沢山の欲望を押さえ込み、そう願いました。

少女は二口りと冷笑を浮かべ階段を昇りました。

私は何も喋つていませんでしたが、不思議と思いが伝わったような気がしました。

「貴方の願い、受け止めました。私が言つことはありません。」

何故か最後の言葉がとても、そう、とても冷たく、心に刺さるようにな響きました。

気付けばそこは先程の商店街。バッグもちゃんと私の手の中。

いつもの商店街をゆっくりと歩き、目的のデパートへ向いました。

この道はいつも人通りが比較的多く、車の行き来も激しいので私は嫌いなのですが、そんな理由でデパートの大安売りを見す見す逃す手はありません。

とにかく前方から来る人に気を付けなければ。ぶつかつたら大変だもの。

そう考えていると、自転車が突然走ってきて、私の横を通りました。そして私が持っていた大事な通帳や印鑑・財布が入ったカバンを凄い力で奪い取ろうとしました。

私は体ごと持つていかれそうなのを必死でこらえ、カバンを握りしめました。

しかし、男はならばと言わんばかりに力を出し、とうとう私からカバンをとりました。

すると男は勢い余つて車道に飛び出して行きました。

気付けば男は原型を留めていないほど、酷い姿をしていました。

続けざまに轢かれ続け、もう身元の特定も難しいほどらしいです。

そして警察から私に手渡されたのは 鮮血で染められた真っ赤なバッグでした。

第一伝・おかね

これは私の息子・しょうたの話です。

冨神社のお陰で、きっと幸せになつたと思います。

でも、私は一生冨神社を憎み、恨み続けます。

私の家は恥ずかしながらかなりの貧乏です。

それは、しょうたが三歳の時、夫が女と浮氣しウチの全財産を持つて家出したことから始まりました。

私には兄弟と父母が居ましたが、兄弟4人姉妹3人という大家族。お父さんやお母さんには迷惑を掛けることが出来ませんでした。

そして、私は一人でしょうたを養つていくことに決めました。財産が一円もなかつた私は、とりあえずパートを始めました。

しょうたには残つていたご飯や野菜を貯え、私は一日一食の生活を送っていました。

しょうただけには、絶対不自由な思いはさせたくない。

その一心だけで私は働き続けました。

しかし、時代は不景気。

どんなに頑張つても、家賃・税金でお金はどんどん飛んでいきます。世間がクリスマスでも、しょうたは一人でお留守番です。

本当に申し訳なくて仕方がなかつたです。涙はもう枯れました。

でも、でも、、「一番辛かつたのはショウタが何も言わないことです。

この子はほとんど泣かなくなりました。

夫が居る時は沢山泣き、駄々をこね、そして沢山笑っていました。

しかし、ショウタは唯一私が泣いている姿を見ると一緒に泣きます。うわんうわんと大声出して泣くんじゃないです。

静かに、ぽろぽろと涙を零します。

ショウタは分かっていたんです。

私がどれだけ頑張つて自分を育ててくれているか。

ショウタに物をせがまれたことは、まったく言つていいほどなかつたです。

絶対にこの子だけは、絶対にこれ以上嫌な思いをさせぬものか。

何度も　何度も　心に誓いました。

そんなこんなで、ショウタは小学校に上がりました。

兄から貰つたお下がりのランドセルにはしゃぎ喜ぶ姿は、今でも眼に焼きついています。

ショウタは小学校に行くよくなつてから、日増しに元気になつていきました。

友達と遊ぶのは何より樂しそうで、その時のことを内職している私によく話してくれました。

本当に 本当に 幸せでした。

ある日、 じょうたは小学校から家への帰り道で、 ちょっと寄り道をしました。

何もないのに周りをぐるぐると見渡します。
まるで、 異世界を見るかの如く。

気付けばそこは深く、 温かく、 明るい森の中。
じょうたは余りの出来事で、 言葉も出ない様子です。

そうだよね、 いつも狭い部屋にいたんだものね。
外で遊んであげれなくて ごめんね。

じょうたは前にある神社のほうへ導かれるように歩きました。
先程まで前にあつたかなんて、 覚えてません。

中から、 高校生ぐらいの女の子が出てきました。
女の子はじょうたを見下ろし、 呟きます。

「 じょうたは風神社。 貴方を助ける為に存在し、 貴方を陥れる為に存在する。 問おう。 貴方は何を今願う? 」

こんな難しいこと、ショウタに言つても分かるはずがない。

ショウタはずっと女の子を見ます。

ショウタ、好きなものを言こなさい。欲しいものを言こなさい。
今まで、今まであんなに我慢したんだもの。
ちょっとぐらい、我がまま言いなさい・・・

しじれりくの沈黙...

突然、少女は一いつと笑いました。

そしてゆうくりと音も立てず、神社の中に入りました。

ショウタ・・・

気付けば私は部屋の中。

もう外は暗いのにしょうたが戻つてきません。

嫌な予感がしたので、すぐに探しに行きました。
今すぐこの腕で、この胸で抱きしめたい。

何故かそう、強く願いました。

しょ「うたのト校する道を走つていると、小さな人影がありました。
「ハンドセルのシリエットも見えます。

「しょ「うたーしょ「うたーしょ「うたー?ー」

叫びながら必死で走ります。

そしてセリヒは

私に差し出されつゝある手「ひ

その小さな手に溢れんばかりの100田玉を乗せた

「ハンドセルと服を着た小さな地蔵が笑顔で立つていました。

第3伝～幸せの香り～

凪神社…ああ…あそこか。
今若い奴らの間で噂になつてゐるんだつてな。
でも、皆知らないんだ。

あの神社に居る神は

俺は馬鹿だった。

周りに反発し、他人を困らせ、親に迷惑ばかりかけた。

家柄は比較的裕福だった。弟は勤勉で、愛想もよく、まさに優等生。
俺はそんな弟に劣等感を抱く、どこにでも居る、ちょっと外れた人間だった。

くだらない生活を続けていたある日、いつも一緒に居るツレからおもしろい話を聞いた。

『新しい変な宗教がこの街に出来たらしい』

詳しく聞いてみると、その宗教は極めて簡単らしく、自分の家にある物品を何でもいいので供えて、自分が、

『伝わった』

と、思つまで祈れば、必ずや願いが叶うといつ何とも在り来たりなモノらしい。

特に規約もなく、誰でも気軽に参加出来るらしいので、今夜適当な

モノを持つてお参りする事に決めた。

俺達はバイクの音をブンブン鳴らしその寺に向かった。

俺が持つてきたのは、一個のみかん。

偶然茶の間にあつたのを分捕つてきたもんだ。

どんなインチキ宗教か暴いてやろうと思つたが、次第に俺らの気持ちは変わつていつた。

それは、信者の顔つきのせいだった。

多少なりとも、宗教に入れば幸福感を得られたりするはず。なのに、寺に崇拜に来る人たちは全員死人の顔だった。

どれほど、酷いことが行われているんだ？

俺達は、周りの人たちには迷惑をかけないよう、寺に乗り込んだ。

寺院の中はとても綺麗だった。

しかし、なんとも言えない不快感が俺達を襲つた。

匂い？ 雰囲気？ どれとも違う。疑問に思いながらも奥へ進んだ。

「入信のかたですか？」

「氣の弱そうな坊主が中には居た。

微笑みながらこちらを見てくる。悪者には見えない。

「いやよお、ちょっと様子みてからはこうつと思つていたんだけどもよ。あ。。」

「他の人達、随分、ヤツレテやがんな？お前ら、物品は何でもいいとか言いながら、実は金目のものを要求してやがつたんだろ？！」

「グラムー・ハツキツシロヤー……」

坊主は表情を変えない。

150

「さあ 手は持っているものを置いて望みを語したやうに入れましょ。」

卷之三

「ねえへーーせつたりうじやないか?!

仲間の一人が坊主の胸倉を掴んだ。

坊主は不思議な笑みをいって、そう深く浮かべた。

「がつあ！？」

声を上げたのは仲間の一人だった。

胸倉を掴んだまま、白田を向き、苦しんでいる。

「ふふ。どうやら効き始めたようですねえ。」この寺院の特徴を、教えてあげましょうつか。」

「ぐふああ！」

「ぐあつあ！」

「ぐわああ！」

他の友達も全員一斉に声をあげはじめた。

「この寺に入った時、不思議な違和感を感じたでしょう？あれは、私が開発した幻覚剤を、素粒子まで分解、それを流した所為です。

坊主は立て続けに説明する。笑みは変わらない。

「この幻覚剤は厄介で、過去、自分が体験した精神的苦痛、肉体的苦痛、すべてを織り交ぜて蘇らせるのです。まあ、30分……程ですが。」

「そして……その30分の間、何をするか……ふふふ……おや？」

俺は坊主を睨み続ける。

全身襲つてくる不快感、痛みは理解できる。だが、このくらいで倒れるものか。

30分の間、ここいらを守つて耐え、ここを出でる人が出来たら勝ちだ。

仕組みをペラペラ話したのだから、警察に言えぱいい。

「ほお。貴方はこの幻覚剤が効かないのですか？」「

「てめえの好き勝手にはなりねえよ。」

「随分、愛されて育つてきたのですねえ。」

「どうこうじだ。」

「親御さん達は、貴方の育成に関わった者たちは皆、貴方のことを大切に育てたのでしょう。だから、痛みも少なければ苦痛もない。まあ、ソレゆえにグレてしまふのも分かりますが。」

「つむせえ。坊主を気取るんじゃねえ、犯罪者。」

「犯罪者…とは人聞きが悪いですねえ。商売人と呼んでくださいよ。ははは。」

坊主は、懐から注射器を出した。5本。ちょうど俺らの人数。

「これはねえ。先ほど幻覚剤を利用して作った、薬です。ルパン3世という映画を参考にして考え付いたんですけど、これを射すと、この寺から流れる幻覚剤を一定期間内に吸わなければ異常な副作用が起るという代物です。時間は個人差がありますが、まあ10日間、幻覚剤を吸わなければ、今、君の横の彼らが起こっている現象が一ヶ月続きます。それを乗り越えたら克服できますが、まあ、一般人は、無理でしようねえ。」

「でも、君は別だ。」

坊主は表情を変えた。

「君は私の野望の邪魔となる。私はここら一帯を全て支配地域にするつもりだ。今度は快感の幻覚剤を作つて、住民を快楽と痛みで支配するんだ。だが君は脅しの道具となる不快の幻覚が効かない。だから、幽閉させて頂くよ? はは。」

「こりゃ一帯…俺のお袋や、親父や、弟もか?」

駄目だ、させねえ、絶対。
それに、こいつらにそんな思ひさせられねえ。

「ノーリテルノーリテルノーリテル…」

俺は全力で拳をふつた。

それは坊主の顔面にクリーンヒットしたか
ソレが罷だと僕はこの
には遅すぎた。

どんどんとまぶたが重くなつていいく。

坊主の顔をどうえでいる右手も、力が抜けですり落ちた。

俺は気付いた。

俺は弟は家まじかられていたのだと母親、父親のことは、只の狂うやうに

母親の愛は、父親のほうが多いと、思っていたんだ。
だから、あいつは俺を抜く為に努力をしたんだろう。

ずつと分かつていたが、心から出さなかつた、推測。でも、きっと

俺は馬鹿だ。

親父やお袋をまた悲しませるのか。

俺が死んで、悲しむのならまだいい。
弟が、居るしな。

でも、これ以上苦痛は『えさせない』
何があつても。

今まで守つてきてもらつた分を、返さなければ。

俺は目を見開き、坊主を睨む。

ほとんどモザイクがかかって見えてはいないが、眼を逸らさない。

「うつむ。本当にしつけですね。さうおど黙ってください。」

坊主はもう一本、俺の腕に注射をした。

俺は叫び続ける。絶対に、負けられない。

レギュラー

•
•
•
•
•
•
•
•
•

ほとんど白に近かつたモザイクが、解けていった。

ああ・・・来て、しまったのか。

俺は。守れないのか。

どんなに体が大きくなつて、守れないのか。

俺は地団駄を踏んだ。

こんなとこであきらめねえ。

皮肉だが、あの坊主のおかげで気付いたんだよ、親から貰つた愛に。

俺は、受けた愛と貰えた苦しみ、全部清算しなきゃなんねえだよ！
！！！！

良く、周りを見てみると、ここは寺院じゃなかつた。

神社・・・かな。

考へてみると、中から女の子が出てきた。

美人だがちつと幼いな。

『ここは風神社。貴方を助ける為に存在し、貴方を陥れる為に存在する。問おう。貴方は何を今願う？』

坊主の次は、巫女か。

どちらを信じればいいものやら。

笑えてくる。俺にはもう願うしかないんだな。

どんなに糋がつたつて、小さいんだよな、人間つて。

「俺を陥れるつてのは、どういうことだい？」

『さあ。時にはお前自身から、または周りを失わせ、時には苦しませ、時には幸福といつ苦痛を貰えるときもある。』

「そつか。後ろ一については一向に構わないんだが、失わせてはいけねえもんが、あんだよ。どうにかならないか？」

『貴様は勘違いしている。』

「は？」

『神は、お前らのものではない。』

「そうだな、そうだ。」

『俺の都合がそう通るわけがない。力が全てなんだ。俺は無力、相手は強大。恥を捨てて、祈るしかないんだ。』

『はは、悲しいねえ。』

『すまなかつた。じゃあ、願いを言つば』

『謹んで聞こう。』

『俺が受けた、沢山の幸せを、皆に返してほしい。俺は、悲しみだけ持つていきたい。きっと残る悲しみは、受けた幸せを仇で返してしまつた罪悪感だから。』

『ふむ。』

『そしたらさ、俺さ、他の奴らに、今度は幸せを送れる気がすんだよ。きっとこれから的人生、俺は満足に生きていけると思うんだ。』

『寺院の件は、いいのか。』

「俺の幸せは、あんなもんよりずっとずっと大きい。きっと消えてしまつたら。」

『貴方の願い、受け止めました。』

彼女は優しい笑みを浮かべた。

坊主のソレとは、比べ物にならないほど。

なんだうな、この感じ。

幸福感で、満たされていく。

さて、頑張りうか。

・・・

「ん？」

「ふわあ。。」

「な、なにが？」

「すげえ、怖い夢を見てたよ、俺。」

「おお、俺もだよ俺も。」

「マジか、お前らもかもよ。」

「つてか、あの糞坊主はどこいった？！」

「いねえ、俺らが痛いとこ突いたからトンズラしたんじゃねえの

か。」

「せせせせせ

「それにしても。いい、匂いだな。」

「ああ、なんだ、この匂い。」

「すうげえ、優しい、みかんの匂いだ。」

その香りは、寺院を飛び出し、一帯を淡いオレンジ色に染めた。皆、田を廻つて、いつ廻つてくれたんだ。

すうげえ、幸せな、みかんの匂いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4351a/>

凪神社

2010年10月26日05時44分発行